

# 伝説の最強カードバトラー

アルパカ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

処女作その2である。

バトルスピリッツダブルドライブからスタートです。

目次

序章	1
第1話	3
第2話	9
第3話	12
第4話	16
第4話(続)	20
第5話	25
第5話(続)	28

## 序章

主人公：天宮竜雅（あまみやりゆうが）

年齢：16歳

元バトスピチャンピオンシップ全国チャンピオン

使用色：全色

外見：ヴァンガード蒼龍レオン似

性格：冷静沈着で隙がない。一部のことに対してルーズ。

バトルが始まると性格が変わることがある。

転生特典：カードの現実化

すべてのカードが記録され、取り出すことのできるタブレッツ

ト端末

すべてのカードの使用許可

ヒロイン：紫乃宮まる

使用色：赤、紫

主なデッキ：ヴィオレまる

詳細：ブレイブ編終了頃 なを、ダンへの恋愛感情は元からない

外見などはそのまま

オリジナル能力など（初めの方は出ないよ）

### ・黒―シンボル◆

―スピリットなどは多作品から

―スピリットやネクサス、ライフなどを破壊して能力を発動する

### ・アストラルゾーン

―アストラルカードを置く場所で、デッキを置く場所の隣にある

―通常のデッキではなく、アストラルデッキを置く

### ・アストラルデッキ

―上限枚数無し

―ドローステップでドロ―できない

―通常のデッキではないのでデッキ破壊の対象などにならない

- ―ドローするためには専用の効果が必要である
- ―アストラルカードのみで構築する
- ・アストラルカード
  - ―強すぎるため、封印されたかつてのカード
  - ―ゲーム開始時にはアストラルゾーンに置く
  - ―手札にある時と同様に使うことができる
- ・ライド（ヴァンガード）
  - ―召喚したスピリットが発動する
  - ―指定されたコストもしくはは系統のスピリット一体を、召喚したスピリットの下
    - ―に表向きで重ねる。重ねるスピリットの下にカードがあつた場合、すべて表向きにして重ねる
- ・ブースト（ヴァンガード）
  - ―フラッシュタイミングで発動する
  - ―アタックする代わりにそのスピリットが持つBP（Battle Point）すべてを指定したスピリットにプラスする
- e
  - ―BPを足すことができるのは、足されたスピリットのアタックが終了するまで
- ・限界突破（リミットブレイク／Limit Break）
- ・究極突破（アルティメットブレイク／Ultimate Break）
  - k）（ヴァンガード）
    - ―コストを払うことで発動する能力
    - ―発動条件を満たすしていないと発動できない
  - ・呪縛激（ロック／Lock）（ヴァンガード）
    - ―フィールド上の指定したカードを裏向きにする
    - ―呪縛激されたカードは破壊できず、疲労状態にもならない
    - ―カード上のコアも動かすことができない
  - ―そのカードの持ち主のエンドステップで元に戻る
- ・解呪（アンロック／Unlock）（ヴァンガード）
  - ―呪縛激されたカードがエンドステップで元に戻ることに

## 第1話

「知らない場所だ」

ただいま絶賛困惑中である。

少年回想中

落ち着いて考えたらおかしいことばかりだ。

わかったことは・・・

- ・自分が天宮竜雅であるということ
- ・ゲーマーの高校生だということ
- ・買った物した帰りに信号無視の車に撥ねられたこと
- ・気がついたら白い部屋に居ること
- ・頬をつねっても痛くないこと
- ・・・あれ、これフツーに・・・

死んだかも・・・(、↓)。

「まあ、いいか」

「いや、良くないでしょう？もう少し驚いてよ」

「……………これでも驚いているのだが」

「驚いているのならもつと面白く反応してよ」

「面倒だ」

「無愛想ね！はっぷっぷく」

「知るか」

普通は驚くだろう。というか驚いている。竜雅は自身がかなりの快楽主義者だと思いうくらいノリはいいのだが、彼は今そんなことで時間を費やすほどの⑨ではない。

そして何よりも目の前に絶世の美少女が居ることに一番驚いている。

「私はラフィール。六絶神よ。」

「だとすると三六絶神 慈愛のエル・ラフィールか？XXレアだったか、」

「ご名答。さすがチャンピオンね。ついでに言うとおあなたのカードなのだけれど。実はあなたが亡くなったらスピリッツワールドに転生させるよう龍皇様から言われてね？私が代表として迎えることになったの。」

「それで今ここに来たと」

「さすがに鋭いわね。なんだけど・・・」

「だけどなんだ？」

「実はね？ジオラスとゼクスがね？じれったいから運命操作してやっちやえくつて脅迫してきて……」

「三緑の起源龍 ヴイリジオラス三と三天魔王 ゴツド・ゼクス三か。それで？」

「へ？怒らないの？」

「まあ破壊的な能力持っているし、仕方ないでしょ。俺も今までの生活に飽き飽きしてたからスピリッツワールドに行けるなら俺はその運命に身を任せるだけ……ってオイ!？」

「うぐつ……ひつぐ……」

「うえ」 えええ……Σ（?ロ?ーー） なんで泣いてるの？」

「だってだって」

「あははは……」

く5分後く

「ごめんなさい……」

「うん。まあいいよ」

「それではあなたに我等全カードを代表して恩恵を差し上げます。ま  
ずは……」

「待て、そこまでは……」



「いらないの？だって・・・『いらない』でもあなたに拒否権はないの！」

「なんでだ？普通はできるだろ？この手の転生物なら」

「やらないと龍皇様に怒られるんだよ（＼／＼）」

「カードも大変だな」

「そーなんだよ！じゃあ説明に行くよ！」

「よろしく頼む」

「一気に行くよ！」

「カードの能力を現実にすることが出来る能力『幻札実化／ネクロカードリア』

「全てのカードが記録され、取り出すことのできるタブレット端末」

『全知端末／オールカードデイスカッシュオン』

「全てのカードの使用許可『全能証明／フルカードアルテミス』です！」

「そーなのかー まあかなりのチートですな。」

「これぐらいしなないとって龍皇様に言われたからね。それと、ひとつ目とふたつ目能力で、私はこれからあなたのことをマスターと呼ばせてもらいます。よろしくね！マスター！」

「やりづらいなあまあよろしく！」



レアリティ：xx

敗北条件の内のひとつをカバーする能力はかなりのチート能力！

デッキアウトには弱くなるがLevel3の能力を使えば敵無し。

.....

さすが絶晶神！

## 第2話

まるSide

ダンはこの世界を守るために死んでしまった。  
そんなことはみんなもう忘れてしまったかも知れない。

それでも私達はあなたのことは忘れない。

ダン、あなたの守った世界は今日も平和です。

そんなことを思いながら帰る道の途中で一枚のカードを見つけた。

「雷皇龍ジークヴルムR（リターン）？」

ダンを思い出すようなカードだった。

そのカードを手に取ったとたんに私を眩しい光が包んだ。

そして気がついたら……

「えっ………きゃあああああ!!」

私は空に放り出されてしまっていた。

まるSideout

「なんだって空に放り出されなきゃならんのだあああああ!」

俺は紐無しバンジーもパラシュートなしのスカイダイビングもしたくねえよ!しかも近くで紫色の髪の少女も一緒に落ちてるし!どーすんだよこれ!

いや!幻札実化ならなんとかなるだろ!使い方知れないけど勘でどうにかする!元全国チャンピオンなめるなよ!

「能力発動!!幻札実化!擬化≡天使長セラファイ≡!」

そう叫んだら背中に天使の羽根ができた。どうやら上手くいったらしい。『近づけ！』と念じると少女へ近づいていった。イメージつてスゲー、

とりあえず少女へ近づいて受け止める。どうにか地面ぎりぎりまで受け止めて着地することができた。

「ふう・・・大丈夫？って・・・えっ!？」

驚いた理由はたったひとつ。それは・・・

気絶している少女が紫乃宮まると似ていることだった、

～15分後～

ただいま絶賛膝枕中である。全く持って誰得かは知らない。だが、一面荒野の中少女の頭を地面につけるのはまずいだろう。

とりあえずわかったことを整理しよう。

- ・ 放り出されたのはダブルドライヴ編の荒野だったということ
- ・ 後からバツクが落ちてきて中には全知端末と俺のデツキケースが入っていたこと
- ・ 食量も少しだけが入っていたこと
- ・ 能力はイメージすることで簡単に使えること（『考えるな、感じろ。』か）
- ・ 助けた少女がブレイヴ編の紫乃宮まると酷似していること

「んっ・・・あれ・・・ここは・・・」

「ああ、おきた？大丈夫？ここは一応荒野だと思うよ」

「あれ、私は落ちてきて・・・っ!!!」

「無理しない方がいいよ。それに紐無しバンジーは趣味が悪すぎる。」

「じゃああなたが助けてくれたのね。ありがとう。私は紫乃宮まるよ。」

「あ、ああ俺は天宮竜雅だ。よろしく頼む。堅苦しくしないでいいから、『本当に紫乃宮まるだとは、』」

「そ、そう？じゃあよろしく竜雅！」

今回のNO. 1担当：竜雅

今回も俺か、まあいい行くぞ！

雷皇龍ジークヴルム、コスト：6 軽減：3 系統：星竜・古竜

Level 1 (1) : 4000 Level 2 (3) : 6000  
Level 3 (5) : 9000

能力 | Level 1 2 3 : 《激突》 『このスピリットのアタック時』 相手は可能ならば必ずブロックする。

— Level 3 : 『自分のアタックステップ』 《覚醒》 を持つ自分のスピリットに 《激突》 をあたえる。

レアリティ—M

アニメ二代目主人公 ダンが最初に手に入れたキーカードがこれだ。マスターレアだが、かなり強い。そういえばまるが手に入れた「雷皇龍ジークヴルムR」ってどんなカードなのか・・・

では、次回！

### 第3話

お互いの自己紹介を終えた俺とまるは地平線まで続く広大な荒野を、バックに入っていたカロリーメイト?を食べながら歩いていた。歩いていく途中、まるは彼女に今まで起こったことをひとつひとつ話してくれた。どうやら彼女は本当に紫の光主であつた紫乃宮まるだつたようだ。話す内容ブレイヴ編のままだし。

「だから、いつかまたダンに会えるかなーって思つてカードもつたら……」

「落つこちていたと……」

「そうなんだよ!もうびっくりだよ。……そういえばどうして私のごと助けられたの?落つこちてるとき見えなかつたのに。」

最大の難関に早くもぶつかつてしまった。まあ彼女なら大丈夫だろう。

「今から話すことは冗談じゃないからね?俺はカードの力を現実にすることができるんだよ。」

「……信じがたいことね。証拠は?」

「うーん、」

俺はデッキがらミラビクリスタミを取りだして、イメージしながら

「幻札実化 召喚 ミラビクリスタミ」

すると、カードが光り始めて白い小ウサギが目の前にチョココンと現

れた。癒しである。

「わあ、かつわいい！」

そう言っただけの速度で飛びついた。

「本当にできるみたいね。謎がひとつとけたわ。」ナデナデナデ……

「そ、そうか、、ならよかったかった……」

その時遠くに何かドーム状のものが現れた。

「……っ!!!なにあれ!?!」

「とりあえず行ってみよう」

そう言って俺達は走り出した。

「エグゼシードのソウルコアを俺のライフに『封印』！」

「なに！」

たしか赤の勇者の茂上駿太とイヌイ將軍のバトル中だった。

まあすぐにバトルは終了。駿太の勝利だった。

「スゲー、本物の十二神皇だ……」

「あら？あなた達は？」

そういつて話しかけてきたのはエトだった。こっちも本物だ、、



「私は紫乃宮まるよ。それでこっちが・・・」

「天宮竜雅だ。」

「そうでしたか。私はエト・エトシンモリ8世です。それとこちらが、」

「キノトです。エト様の身のお世話をしております。」

そういつてチャイナドレスのような服を着た少女が前に出てお辞儀した。

「よろしく(ね)」

「あなたがたも十二神皇に導かれし勇者ですか？」

「じ、じゆうにしんおう？」

「いや、そんなもん(の場所)は知らん。」

「そうでしたか。残念です・・・」

「ん？誰だお前ら」

「そういうお前は？」

「俺か？俺は茂上駿太。赤の勇者だ！」

「そうか俺は天宮竜雅だ。」

「よろしくな！竜雅！それで、お前の十二神皇はなんだ？」

「俺はまだ十二神皇を使ったことはない。」

今回のNo. 1担当：まる

今回出てきた十二神皇を紹介します！

馬の十二神皇 エグゼシード

コスト：8 軽減：4 系統：神皇・皇獣 シンボル：2つ

BP Level 1(1)：15000 Level 2(3)：20

000 Level 3(4)：25000 Level 4(12)：3

5000

能力 Level 1234：《封印》『このスピリットのアタック時』  
このスピリットのソウルコアを自分のライフに置ける。

1 《封印時》 Level 1234：系統：「神皇」／「十冠」を持つスピリットすべてに”《走破》『このスピリットのアタック時』相手のスピリット／アルティメット1体を指定してアタックできる。ブロックされたバトルの終了時、このスピリットのシンボル1つにつき、相手のライフのコア1個を相手のリザーブに置く”を与える。

1 Level 1234：BP 15000以下の相手のスピリット1体を破壊できる。

レアリティ：X

さすが、シリーズ最初の赤のXレアね！封印したときの効果は相手のスピリットとライフを一度に破壊！

封印時の能力は、エグゼシード以外にも能力を与える優れものよ！

## 第4話

「十二神皇を使ったことはない。」

「なーんだ。あれ、じゃあどうしてここに？まさか暗黒バトラー!?」

「んなわけないだ．．『なぜばれたーんだ!?!』．．．．．。」

「やつぱり．．．え?」

さきほどイヌイ將軍が帰って行ったところに変な風に変形した忍者がたっていた。

「誰だお前?」

「よくぞ聞いてくれるーたね赤ー勇者。私ーは暗黒バトラーーのアルフだーよ。」

「エト暗黒バトラーってなんだ?」

「あっはい!邪神皇を復活させてこのスピリッツワールドを崩壊の危機へと陥れようと目論むカードバトラーのことです。」

「ふーん」

「あっ．．．竜雅さんなにを!?!」

俺はアルフに向かって歩き出す。

「バトスピなくなると嫌だからさ。帰ってくれない?」

「オイ！そいつは俺がやるって！」

「ちよつと竜雅？大丈夫なの？」

駿太とまるが咎めてくる。俺ってそんなに弱そうかね、

「大丈夫だつて。俺、これでも元バトスピ全国チャンピオンだから。」

「それでーはわたしがあなーたに勝ったーら十二神皇はもらいまーす  
！」

「嫌だn『いいだろう。』……えええ、」

「そうだ！竜雅さん！これを！」

そう言つてエトは俺にソウルコアを投げてきた。当然俺はそれを  
キャッチする。

「それじゃいくーよ。」

『バトルアーマー、オーン』

『ゲートオープン、解放！』

○少年変身中○

「へええ、これがバトルフィールドか。」

「二頑張つて（ください）！竜雅（さん）！」

「ああ、やれることをやるだけだ。」

「それじゃあいくーよ。まずはフェンリルキャノンをしようかーん。  
そしてターンエンード。」

フェンリルキャノン

Level 1 (1) BP : 3000

「ドロー。 . . . . 召喚 三天使 リユイエル」

天使 リユイエル

Level 1 (1) BP : 3000

「おお、さすが。本物だな。ターンエンド。」

バトスピ自体久びぶりだがなんとかなるだろう。

もう一度あのころを思い出してやっていくんだ。

長いので中略

第11ターン目

アルフ

ライフ : 4 手札 : 5

スピリット : フェンリルキャノン

Level 2 (3) : 5000

不滅龍 エターナル・ドラゴニス

Level 2 (2) : 7000

空の要塞皇 キングフォートレス

Level 1 (1) : 5000

竜雅

ライフ : 2 手札 : 16

スピリット : 天使 リユイエル

Level 1

天使 デュナミス×2

Level 1 (1) : 3000

天使 スピエル×2

Level 1 (1) : 1000

六絶神 エル・ラフィル

Level 2 (2) : 6000

ネクサス：天使の舞い降りた場所 Level 1

エイレインの雲上要塞 Level 1

―アルフのターン―

「これで終わりーねー！アタックー！」

『これでライフは0だ。』ライフで受ける。」

「ぎああ!!」

その時俺のライフは0になった。

## 第4話（続）

その時俺のライフは0になった。

だが、今の俺には通用しない。

「……………へ?」

「なんで倒れないんだ!?!」

「……………エル・ラフィール」

「え!?!」

「エル・ラフィールの効果で、フィールドに黄色のシンボルしかないとき、俺はライフが0になっても敗北しない。」

「なんだとー!!」

「すごいです！竜雅さん！」

「クッ！ターンエンド！」

「俺のターン。エル・ラフィールの効果で、デッキから6枚破棄。

ドローステップ！

メインステップ！

召喚 三天使長 セラファイー!!!」

天使長 セラファイー

Level 1 (1) BP : 4000

「召喚時効果発揮！ 『召喚時』手札にあるコスト6以下の系統：「天霊」を持つスピリットカード一枚につき、リザーブのコアひとつをトラスシュにおくことで、コストをは払わずに好きなだけ召喚する！」

「召喚！・三天使ライエル！・三」

天使 ライエル×2

Level 1 (1) BP : 5000

「さらに！マジック≡セブンスヘヴン≡！」

竜雅が召喚した天霊のスピリットが竜雅の周りで呪文を唱え初めた。

「まだ何かあるのか!？」

「我が呼びし七人の天霊よ。今その力を示すとき！」

竜雅のライフ：0↓7

「竜雅すごい！」

「なにいい!!」

「セブンスヘヴンは俺がライフを7になるようにボイドからコアを置く！」

そしてエル・ラフィルをLevel 3にアップ！」

Level 2 (2) : 6000 ↓ Level 3 (5) : 10000

「くそー！」



「アタックステップ！アタックだ！ライエル！」

「ライフで受ける！」

アルフのライフ4↓3

「続け！スピエル（×2）！」

「……ライフ。」

3↓2↓1

「俺を先導したカードだ。負けるはずがない！最後だ！エル・ラフィ  
ル！」

「……ライフ………くそっ！」

1↓0

勝者：竜雅

「俺の勝ちだ。」

俺はバトルを終えて地面にたった。

「くそー！覚えていろーよ!!」

アルフはイヌイ將軍の帰って行った方向へと走って行った。

「気がむいたらな。」

「竜雅さんすごいです！」

そう言つてエトは目を輝かせていた。

「お前すごいな！」

「竜雅つてそんなに強かつたんだ。」

「さすが竜雅さんですね。赤の勇者よりも頼りになります。」

駿太、まる、キノトの三人も目を輝かせていた。信頼されるの速くね？

「あ、ありがとう、、、。『赤の勇者よりもは彼に失礼だろう、、、』」

「ということ、は、竜雅さんは黄色の勇者ですか？」

「それは違うぞキノト。たしかに俺はエル・ラフィルによつて此処へと呼ばれたが、十二神皇によつてじゃあない。十二神皇に選ばれた者が勇者なら選ばれていない俺は勇者じゃない。それに俺には得意な色はない。」

「じゃあお前は全色使いか。それに元全国チャンピオンなんだろ？すごいなー！」

「それでもない。全て使える方が相手の戦い方を読みやすいからな。」

「では、まるさんも違うのですよね。」

「うん。十二神皇には選ばれていないからね。」

「では、もう一人異世界から来た方がいらつしやるのですか？」

「此処は……何処だ？」  
緑色のマフラーを着けた少年が立っていた。

今回のNO.1担当：エト

今回は私ですね！今回はマジックです。それでは行きましょう！

(マジック) ～セブンスヘヴン～ コスト：7 削減：5

能力トラッシュにあるこのマジックカード、一切の効果を受けな  
い

メイン：自分のライフが7になるように、ボイドからコアを置  
く。この効果は自分のフィールドに系統「天霊」を持つスピリットが  
7体以上ないと使えない。

フラッシュ：このターンの間スピリット一体を、BP+500  
0する。

かなり強力ですね。”天霊長 セラファイ”などを使ってコンボ  
を狙ってください！

## 第5話

「ここは何処だ？」

緑のマフラーをした少年が立っていた。

俺達5人は延々と続く荒野をあるいていた。

「なあ、此処ってバスとかコンビニとかないの？」

「ばす？コンビニに？それはスピリットですか？」

「エト。それはスピリットじゃないよ。それに駿太。そんなものがスピリッツワールドにあるわけないだろう。」

「駿太君。バスはまだしもお店が在るように見える？」

「食べ物はいいですが、水を手に入れるは大変ですよ。」

「ええ………」

駿太はその言葉を聞いてうなだれた。まあ、幻札実化使えばなんとかなるけど。それに食べ物はほとんど無理だし。

「……おはぎ食べたい。」

「竜雅、あなた駿太君に言ったこと忘れたの？」

「(さすがにおはぎは幻札実化でもだせないんだよ、)」「

「むうう……そんなの知らないもん!!」

多少どうでもいい話をしながら歩いてきた。すると、緑のマフラーをつけた少年が歩いて来た。

(うん。ヨクだよね、、)

「お前達に聞く。此処は何処だ?」

「そう言うお前は『つ!!』・・・なんだ?」

「あなたが緑の勇者ですね! ようこそスピリッツワールドへ。あなたは酉の十二神皇に選ばれし勇者なのです。」

「お前も勇者なのか?」

略

簡単な自己紹介を初めずにエトは邪神皇復活について話し初めた。  
が、

「邪神皇復活? そんなこと俺には関係ない。」

まあ、当たり前だよな。いきなり自分が勇者だと言われれば、困惑する。駿太のようにおひとよしでもなければ、まるみたいの前に一度ある訳でもない。”邪神皇復活を阻止してください。”とエトに言われたところで強力するはずがない。だが、

「なあ、エト。」

「ひっ、ひゃい!」

「なんでそんなに驚いてるんだ、、」

俺はヤクザかなんかか?

「す、すみません……。えっと……。なんでしたっけ？」

以外にドジっ娘なのか？

「何も聞いてナイヨ……。んじや、気を取り直して。邪神皇が復活してこのスピリッツワールドが崩壊したら、俺達の世界はどうなるんだ？バトスピで繋がってるんだろ？」

「あつ……。はい！……。良くてバトスピ自体の消滅。最悪の場合は、

——貴方達の世界そのものがなくなる可能性があります。」

「なつ……。バルガルドが!？」

「そんなのは聞いてないぞ！」

そう、自分自身に関係してくれば話はかわってくる。人間は所詮そんなものだ。

そして……

赤騎士カブトーがやってきていた。

?????????

## 第5話（続）

「見つけた。見つけたのである。（ポントツ 我こそがスピリッツワールドにその名有りと唄われる赤騎士カブトーである。（ポントツ 十二神皇は我がもらい受けるのである。」

赤騎士カブトーが崖の上に立っていた。って言うか暗黒バトラーは変なしやべり方しかできんのか。

「あいつもイヌイ將軍やアルフの仲間か？」

「はいー！」

「ずいぶんと変なしやべり方ね。」

まる、それは言わない方がいいぞ。

「もしや、イヌイ將軍やアルフを倒した勇者は貴様であるか。こんな小わっぱに負けるなどあいつらも情けない。」

「なんだとー!!」

駿太はあつさりと挑発に乗っていた。

「しかーしー！このカブトーがきたからには……」

そう言つて近くの岩を持ち上げて、ドカーンと破壊した。……  
今のいるの？

「これが貴様らの運命である。」





「ま、まあまあやるじゃん。」

キノト、エト、駿太は称賛している。が、俺は違った。

「ちよつとまずいかなー、。。」

「?どうしてですか?」

エトが俺のつぶやきに反応した。まゐはわかっているらしい。まあ、長くダン君の近くにいたからねえ。

「今の攻撃でヨクのブロックできるスピリットは0。対してカブトーのライフは2。一見して有利に見えるが、カブトーのリザーブのコアは一気に3つ増えたとも言える。つまり、カブトーはキーカードを召喚するチャンスになった訳だ。俺なら1体はブロックとして残している。相手が赤、紫の時はその方がいいだろう。」

俺が理由を言っている間にカブトーは三ムシヤレックス三を召喚し、マジック三フレイムテンペスト三でヨクのスピリットと、自身のミアシガルラプター三を破壊した。

「あやややや、。。」

ヨクはスピリットを召喚するも何もできないままターンエンドその後、カブトーは三天剣の霸王ジークスサノフリード三を召喚し、ヨクのライフを3つにした。

「大丈夫なのかな?」

「心配ないだろうがな。まゐは?」

「竜雅が心配ないなら大丈夫ね!」

その後ヨクは三西の十二神皇ゲイルフェニックスを召喚し、《封印》。

「ゲイルフェニックスの『飛翔』の効果発揮！」

ゲイルフェニックスは、相手のスピリットを疲労状態でもブロックできるようにする代わりに、コスト1払えば回復する。

「勝負に待ったはないのだろうか？ いけ！ゲイルフェニックス！」

「なにいい!!」

カブトのスピリット2体とライフを2つを破壊。

こうしてヨクは暗黒バトラーの一人、カブトに勝ったのだっだ。

今回のNo. 1担当：ヨク

???. 今回俺のカードだ。

く西とりの十二神皇じゅうにしんおうゲイル・フェニックスく 緑

コスト：7 軽減：4 系統：神皇・爪鳥

Lv1 (1) 10000 Lv2 (3) 13000

Lv1・Lv2 《封印》『このスピリットのアタック時』

このスピリットの「ソウルコア」を自分のライフに置ける。 《封

印時》Lv1・Lv2 【飛翔】『このスピリットのアタック時』バト

ル終了時、1コスト支払うことで、このスピリットは回復する。(相

手は疲労状態のスピリット／アルティメットでブロックできる)

Lv2 『このスピリットのアタック時』 系統：「神皇」か「十冠」  
を持つ自分のスピリット1体につき、このスピリットをBP+500  
0する。

シンボル：緑

コスト1で回復できる。俺のキースピリットだ！